

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2015.12) 平成26年度:47-48.

壮年期で婦人科がん化学療法を受けている患者の治療を支える因子

本田 英里、武田 なつみ、角井 希望、太田 一美

壮年期で婦人科がん化学療法を受けている患者の治療を支える因子

旭川医科大学病院 5階東ナースステーション ○本田 英里、武田なつみ、角井 希望、太田 一美
キーワード：婦人科がん、化学療法、社会的役割

I. 目的

中規模大学病婦人科病棟では、長期的に化学療法を受けている壮年期のがん患者が多く、副作用を抱えながらも前向きに治療に臨んでいる姿が印象的である。そこで本研究では壮年期で婦人科がん化学療法を受けている患者の治療を支えている因子を明らかにする。

II. 研究方法

1. 対象：化学療法を受けている婦人科がん患者2名。
2. 調査方法：1) 期間：平成25年8月中旬～9月初旬 2) 半構成的面接法を用いた質的研究とした。3) 入院時に同意が得られた場合、治療を支える因子が明らかになるようなインタビューガイドを作成し、それをもとに実施した。4) 対象の属性は、診療録・看護記録から情報収集した。3. 分析方法：逐語録より意欲を支える因子に関する記述内容を抽出した。内容の共通点・類似性に基づいてコードを集め、カテゴリー化した。

III. 倫理的配慮

協力は自由意思であり、同意の撤回が可能で不利益が生じないこと、プライバシーの保護、公表の同意を得た。情報は、研究以外で使用せず、研究終了時に破棄する。又、所属の倫理委員会の審査を受けた。

IV. 結果

逐語録より治療を支える因子に関する記述内容を抽出し、40個のコード、7個のサブカテゴリー、4個のカテゴリー：社会的役割に対する想い、家族の存在、苦痛症状の軽減、ピアサポートが導き出された。表1にコードの抜粋を示す。

表1 コードの抜粋

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
社会的役割に対する心情の移り変わり	できれば復職したい	・ボランティアでも良いから復職したい。
	仕事が出来なくなった辛さ	・化学療法をする前は、仕事が生きて良かった。 ・仕事をやめたことが自分にとって辛かった。働けない自分が辛くて、そのことを考えないようにしていた。
	治療に伴う社会との関わりの変化	・治療をするようになり、どのくらいで治るか分からないため、仕事を辞めた。 ・最低限の町内会の仕事はしている。
家族の存在	家族の協力・支え	・一番は家族の支え。
	家庭内での役割遂行	・役割的には主婦・母親として変わりはないが、夫には迷惑をかけていると思う。
ピアサポート	患者間のつながり	・(患者同士で声を掛け合い) みんな頑張ってるから頑張ろうと感じる。
治療効果の実感	体調変化の実感	・最初は、妊婦みたいなお腹で、飛び降りたら楽と思っただけど、治療をやるごとに楽になり、頑張ろうという気持ちになった。

V. 考察

【家族の存在】【ピアサポート】原田らは、「危機的状況で治療を開始したが、家族や友人の存在や励まし、他患者との交流によって思いは変化し治療を継続する力となっている。」¹⁾と述べている。鈴木らは、「がん患者のQOLを高めるためには、どのような病期あるいは状況においても患者にとって身体的、心理・社会的、霊的により安定した状態になるように援助することが重要である。すなわち、患者にとって身体的苦痛のない状態で、心配や不安がなく自分が納得した治療あるいはケアを受けられ、自立した日常生活を営みながら普段と変わることなく自分の社会的役割を果たせることである。」²⁾と述べている。以上より、両者とも先行研究と同様に家族の存在が治療を支える因子となっている。

治療中も家庭内の役割を遂行するために、セルフケア能力維持できるよう介入していく必要があると考える。

【社会的役割に対する想い】両者とも仕事が生き甲斐であり、辞職した辛さを経験している。鈴木らは「人は社会においてさまざまな役割を持つが、病気のためにそれらの役割を十分果たせなかったり、あるいは役割の変更を余儀なくされたりしたとき、自己概念が脅かされ危機に陥りやすくなる。」²⁾と述べている。また、山瀬は、適応への段階の危機介入で社会復帰の希望を抱かせることを挙げている。A氏は治療に伴い社会との関わりが減り、「働けない自分が辛くて、考えないようにしていた。」と話されており、鈴木らが述べているように危機に陥っているようにみえる。しかし、A氏の最終的な目標は社会復帰することであり、その思いが治療を支える

因子になっていたと考える。そのため、治療と社会的役割が両立できるよう援助していく必要がある。【苦痛症状の改善】B氏は、当初身体症状が辛く、死を意識した発言が聞かれていた。しかし、症状が軽減したことで治療の効果を実感し、治療を支える要因となっていた。そのため、患者の苦痛症状の緩和は意欲を支える一助となる可能性があると考ええる。

VI. 結論

1. 婦人科がん化学療法を受けている両者の治療を支える因子として、社会的役割に対する想い、家族の存在、苦痛症状の軽減、ピアサポート、の4つのカテゴリーが抽出された。
2. 家族の存在や社会復帰への希望は治療を支える因子となっていると考えるため、治療中も家庭内や社会的役割を遂行できるように介入していく必要があると考える。
3. 苦痛症状の緩和は意欲を支える一助となる可能性がある。

【引用文献】

- 1) 原田英 他：周期的に婦人科がん化学療法を受ける患者の思いの変化―「治療を継続する力」に変わるまで―、日本看護学論文集 成人看護Ⅱ、39号、271―273、2009
- 2) 鈴木志津枝 他：成人看護学 緩和、ターミナルケア看護論、初版、第6刷、53、2009